

14. 2型糖尿病患者における 血漿総ホモステイン濃度と 血管内皮細胞障害および大血管 症との関連

一般内科、中野智紀、奥村期一、竹林晃三、
伊藤啓司、鈴木敏胤、島村絵里子、麻生好正、
犬飼敏彦

目的: 2型糖尿病患者における血漿ホモステイン濃度(tHcy)と大血管症発症率および血管内皮細胞障害との関連を検討した。

対象: 2型糖尿病患者103名(大血管症群26名、非大血管症群77名)を対象とし、それぞれtHcy、血漿トロンボモジュリン(TM)、クレアチニンクリアランス(Ccr)を測定した。また、tHcyと糖尿病性腎症の影響についても解析・検討を行った。

結果: 糖尿病性腎症の条件を考慮すると、血漿tHcyは大血管症の有無で有意な差を認めなかった。またtHcyはTMの独立寄与因子であることが明らかになった。よって顕性腎症を持つ2型糖尿病により、tHcyが上昇することでTM上昇という糖尿病の血管内皮細胞機能障害の発症を惹起し、最終的に冠動脈疾患の発症を高めることが示唆された。

15. 甲状腺機能低下ラット における副腎機能

実験動物センター

茂木泰敬, 藤平篤志, 今 弘枝, 篠田元扶

目的: 先天性甲状腺機能低下モデルであるrdwラットを用いて、下垂体・副腎軸について検討を行なった。

対象・方法: 実験には12-24週齢の雄性rdwラットを用いた。対照群としてヘテロ(+/-)を用いた。また、T4(水道水で1.5mg/Lに調整)をrdw(-/-)に1ヶ月間、飲水により投与しT4処置の効果についても検討した。断頭による採血もしくは事前に留置した頸静脈カニューレから採血を行い拘束ストレス負荷に対するACTHおよびコルチコステロン分泌反応について検討した。

結果: ストレス負荷前の血中コルチコステロン濃度の基底レベルはrdwラットで対照群よりも低く、T4処置により対照群の水準に回復した。拘束ストレス実験において、コルチコステロン分泌反応はrdwで低く、ACTH分泌反応はrdw群で高い結果となり、T4処置により対照群と同じレベルに回復した。

結論: 甲状腺ホルモンの低下は視床下部・下垂体の上位よりはむしろ副腎皮質により強く影響を及ぼすことが示唆された。